

井原豊「への字型イネづくり」3部作の復刊にあたって

1980年代から、1997年に67歳で亡くなるまで、『現代農業』や単行本で健筆をふるった兵庫県の農家、井原豊さん。イネの力を信じ、「への字稲作」で、もっとおおらかにイネを育てようと呼びかけ、語りかけた井原さんの言葉は、「への字」に育った太茎の痛快かつ豪快なイネ姿とともに、多くの農家を惹きつけていった。

そんな「への字稲作」が、今、改めて輝きだした。徹底した低コストが「への字稲作」の身上だが、これに加え、生育中期の活力が高いへの字のイネは高温障害に強く、刈取り時には鮮麗な熟色になって「天寿をまっとうする」育ち方はタンパクが残りやすく、食味向上につながると注目されている。

「今のイネづくりのすべてを逆にしたへの字理論は、イネの生理からみてほんとうの正しいイネづくりである。篤農家の稲作技術ではない。わが国稲作二〇〇〇年の集大成ともいうべき、日本古来の先人の知恵の塊である」と言い切った井原さん。現代のイネづくりに刺激的なヒントを与え、そして「知恵の塊」を伝える農家が書いた本として、私たちは井原さんのイネ3部作を復刊することにした。

復刊にあたって、それぞれに識者による解説を加えることにした。1998年、井原さんの早過ぎる死を悼む本『井原死すともへの字は死せず』が追悼集刊行会(事務局・山下正範)によって刊行され、そのなかで、橋川潮さん、宇根豊さん、稲葉光圀さんが、井原さんから学ぶこと、引き継ぎたいことについて長文で本格的な考察をしている。20年以上前の文章だが、今読んでもたいへん示唆に富むものと考え、再掲載させていただいた。以下、3部作と解説について、簡単に紹介したい。

『ここまで知らなきゃ損する 痛快イネづくり』(1985年12月発行)

井原さんの初めての単行本は、同年7月発行の『ここまで知らなきゃ農家は損する』。徹底した低コスト栽培を追究する井原さんが、「肥料は経営を狂わす元凶だ」といったぐあいに、肥料や農薬、機械など、資材の買い方使い方で農家はこんなに損していると、歯に衣をつけず軽妙に指摘。「目から鱗」と大きな話題となった。そんな反響が続くなか同年12月、初めての稲作本『痛快イネづくり』が発行された。徹底低コストの「への字型イネづくり」の考え方と方法を『現代農業』の連載をもとに、筋道だててそれこそ痛快に表現した。

解説は、V字理論を真っ向から批判した数少ない研究者の一人である橋川潮さん(滋賀県立大学名誉教授・故人)。「水田の力 イネの力を信じる『への字』」と題し、水田の養分収支めぐりの研究成果にもふれながら、「すばらしい水田地力を100%活かそう」と提案している。

『ここまで知らなきゃ損する 痛快コシヒカリづくり』(1989年3月発行)

『痛快イネづくり』から4年後に発行。倒れやすくつくりにくい良食味品種をつくりこなしてこそ日本の稲作に将来があると井原さん。コシヒカリ・朝日・ハツシモなどの良質米栽培の指針として「への字稲作」の魅力と自在なありようを存分に語っている。

解説は、元福岡県の普及員で、減農薬運動の推進役を担った宇根豊さん。「井原豊は何の扉を開いたのか」と題し、なぜ井原さんが書く記事や単行本が農家の心をつかむのか、「表現者」としての井原さんに焦点を当てて記述している。

『写真集 井原豊のへの字型イネづくり』(1991年3月発行)

井原さんのイネを撮り続けたカメラマンの協力を得て写真集にまとめた。「自分のイネと比べながら、いつどのぐらいの姿をめざすかをわかっていただければ、への字型稲作の真意を理解願えると思う」(「まえがき」より)

解説は、稲葉光圀さん(民間稲作研究所代表)。「二十一世紀稲作の主流 環境保全稲作の基礎を築いたへの字稲作」と副題にあるように、「環境保全型農業」推進の立場から「への字稲作」の技術のしくみと価値を明らかにしている。

本復刊3部作が、これからのイネづくりを考える素材に、そしてイネづくりのおもしろさが膨らむ「稲作談議」の一助になれば幸いである。井原豊さんもそれを願っていると思う。